

## レギュラトリーサイエンスタスクグループ 第4期報告

永井孝志（農研機構）、藤井健吉（花王）、村上道夫（大阪大）、小野恭子（産総研）、平井祐介（NITE）

### 【概要】

レギュラトリーサイエンスタスクグループ（以下 RSTG）は、2022～2024 年の第4期活動において、主に年次大会での企画セッションの開催を軸に活動を行った。レギュラトリーサイエンスの本質は意思決定科学であり、意思決定のための判定基準を検討するリスク学とは高い親和性を有する。レギュラトリーサイエンスの事例分析やリスク比較をテーマとし、歴史的な変遷・身近で見過ごされてきたリスク・今年注目されたリスク等の観点からの議論を、年次大会の企画セッションや合宿等の場で行った。

### 【活動】

（1）日本リスク学会年次大会においてそれぞれ以下の企画セッションを開催した。

2022 年度：新規技術の社会実装に向けたリスク評価手法の開発

新規技術分野（ドローン、自動車の自動運転、蓄電池等）のリスク評価や安全性評価を対象とし、各分野に携わる研究者・実務者から、社会実装の姿とそこに向けたソリューション、それに対してのリスク評価・安全性評価手法の現状と課題について講演いただき、議論を行った。

2023 年度：リスク学の視点から PFAS 規制のありかたを話し合う

永遠の化学物質とも呼ばれるペル及びポリフルオロアルキル化合物(PFAS)の規制のありかたについて、PFAS 特有の特徴や過去事例との類似点などを話題提供しつつ、パネリストがリスク学の様々な角度から PFAS 規制のあり方を議論した。

2024 年度：リスク学の視点から PFAS 規制のありかたを話し合う その2

昨年度に引き続き、さまざまな主体の取組を共有することで多角的な議論をすることを目的として、国や国際機関、産学官の連携や自治体の取組を報告いただき、PFAS 規制のあり方を議論した。

（2）RSTG 合宿を 2023 年 7 月 1～2 日、2024 年 8 月 17～18 日に山形県長井市で開催した。年次大会における企画セッションのテーマについての議論や、RSTG としての MIP 論文のとりまとめについての議論、各参加者からの話題提供等が行われた。

### 【成果】

開催した企画セッションについては、開催報告をリスク学研究に投稿し、公表されている。リスク学研究の MIP(Most Influential Papers)特集企画については、RSTG としてリスクガバナンスに関する重要な論文「Klinke and Renn (2002) A new approach to risk evaluation

and management: risk-based, precaution-based, and discourse-based strategies. Risk Analysis, 22(6), 1071-1094」についてとりあげ、その内容と波及効果について紹介した。また、メンバーが学会やセミナー、講演会などを通じて、レギュラトリーサイエンス概念を普及させる活動も継続している。基準値の根拠を探るシリーズについては、「基準値のからくり」の続編となる「世界は基準値でできている」が出版された。

#### 成果物リスト：

1. 永井孝志、平井祐介、浅見真理、菅野純、羽成修康、中村圭介、谷保佐知、山下信義、東川直史、金見拓、名取雄太（2025）企画セッション開催報告 リスク学の視点から PFAS 規制のありかたを話し合う その 2. リスク学研究【特集：第 37 回日本リスク学会年次大会】，35(1), 3-7
2. 平井祐介、村上道夫、井上知也、田中周平、永井孝志、浅見真理、畝山智香子、清水右郷（2024）企画セッション開催報告 リスク学の視点から PFAS 規制のありかたを話し合う. リスク学研究【特集：第 36 回日本リスク学会年次大会】，34(1), 17-20
3. 村上道夫、小野恭子、井上知也、西川佳孝、小島直也、岩崎雄一、平井祐介、藤井健吉、永井孝志（2024）リスクガバナンスの分野横断的波及効果：レギュラトリーサイエンス的視野からの考察. リスク学研究【特集：MIP プロジェクト】，33(4), 155-165
4. Murakami Michio, Nagai Takashi, Kai Michiaki (2023) Ethical and social perspectives of risk assessment, management, and communication in radiological protection and chemical safety. Japanese Journal of Risk Analysis, 32(2), 101-116
5. 永井孝志（2023）政策立案に役立つ解決志向リスク評価. リスク学研究【特集：2022 年度年次春季シンポジウム】，32(2), 97-100
6. 永井孝志、村上道夫、小野恭子、岸本充生（2025）世界は基準値でできている，講談社.